

【六段】

この十句では、太宰府謫居での生活における精神状況を詠む。太宰の地に着いて荒れ果てたこれからの宿舎となる官舎に移る、その時から新たに始まる精神的苦痛、孤独感、疎外感、寂寥感、そして何よりも辛かったのは、こうした厳しい現実を、現実のものとして受け入れなければならなかった苛酷な現状ではなかったのか。そしてその道真が心の支えとして得ようとしたものは、この今の苛酷な現状と類似した体験を持つ、過去の偉人たちであった。そして、それに倣い、追体験をする以外に、今の自分を鼓舞できるものは存在しなかった所に、この詩を創作しようとした時に発想を得たと思われる白居易らのそれとは全く異なる、「道真の筆舌に尽し難い孤独感があったこと」を改めて想起する必要があるのではないだろうか。

51句「同病求朋友」や52句「助憂問古先」は、55句「傳築巖邊耦」に込められた「傳説」の故事の出典である『史記』等の一文の内容であり、『孟子』「告子章句下」の一文の内容に他ならない。とりわけこの『孟子』の一文が道真をどれほど勇気付けたものであったか、想像に難くない。そして更に、56句の「范舟湖上扁」に込められた「范蠡」の故事を理解すれば、権力者の圏外に自分の身を置くことの出来なかつた我が身の無念さが、一層際立ってくるのである。そしてこの道真の、古人に求めるものは、57句の「長沙沙卑濕」に込められた賈誼の故事や58句目の「湘水水瀟瀟」に込められた屈原の故事の世界なのである。

あわせて、53句の「才能終蹇剥」の意味するものは、「傳説」の故事が理解できれば、55句目の「傳築巖邊耦」の句内容と呼応しているものであり、同じく54句目の「富貴本連遭」の意味するものは、56句目の「范舟湖上扁」